先生、大好きです

とりまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
先生、大好きです

【Ｎコード】
Ｎ３６０８Ｈ

【作者名】
とりまる

【あらすじ】
一番生徒に人気のある教師、霧島結華（独身）は、問題を抱えた生徒と言われる羽鳥アスカと東田蓮に懐かれていた。心に闇を抱えた二人は、結華の優しさに甘えていく。けれども結華が気づいた時、二人の愛は暴走していた。

第1話　霧島結華

「という事で東田蓮君と羽鳥アスカさんは霧島先生が受け持つという事でよろしいですね？」
「・・・え？あ、ハイ」

まずい、全然聞いてなかった。
今年で教師生活2年目になる霧島結華は、歳も近く、人柄もよいので生徒達に好かれている。
そんな彼女は、「問題を抱えた生徒」と言われる東田蓮と羽鳥アスカを受け持つ事になった。
この二人は入学当時から何故か誰とも仲良くしようとはせず、クラスで浮いている状況だというのだ。
そんな中、9月に結婚してやめてしまった先生の後釜として、結華がやってきた。
彼女は面倒見も良く、気さくないいお姉さん、として生徒達とあっという間に仲良くなった。
それは東田蓮と羽鳥アスカも例外ではなかった。
そばに行くだけでキレられる。そう言われた蓮は、自分から結華に近づくようになり、すっかり懐いている。アスカも、同じように結華の家に自分から遊びにいったりしている。
だからこそ、霧島先生に任せたい、と生徒指導の中山は言ってきたのだ。

「え・・・いやもちろんやらせていただきますけど・・・。でも私にできるかなぁ・・・」
「できますよ。霧島先生なら」
「あ、あはははは・・・」

結華は、正直不安だった。いくらあの二人が自分に懐いているからとは言っても、一歩間違えれば二人は昔に逆戻りになってしまう。

「では、クラス分けはこれでいいですね。期待していますよ。貴女ならあの二人を更正できるって」

「あ、そ、そうですか」

軽い礼をして、結華は鞄を持つ。

「先生」

校舎を出てバイク置き場に行くと、羽鳥アスカがゴスロリ姿で立っていた。彼女はこの学校が自由服なのを良いことに、毎日のようにロリータを着てくる変わった少女だった。もっともそのロリータはアスカの美貌によく映えてはいるが。

「どうしたんだよ。こんな時間に」

「新しいお洋服を買ったんです。先生に見て貰いたくって」

って言ってももう9時だが。

「んー。似合うじゃないか。可愛いよ」

そう言うとアスカはぱぁっと花が咲いたように笑った。

その顔が少しかわいかったり。

「先生にそう言われると嬉しいです！じゃ、新学期に逢いましょうね！」

「ああ。新学期にな」

アスカはとととっと校門に向かって駆けていった。
そこでふと結華は思う。
―何でそれだけのためにわざわざこんな時間に？
けど、あまり深く考えることはしなかった。

第2話　新学期～バイク横～

今日から新学期だというのに、天気はあいにく曇りだった。
バイクを留め、ヘルメットを外す。

「先生！」

横から聞き慣れた声がする。
声がした方を見ると、そこには赤と黒のゴスロリを着た羽鳥アスカがいた。
新学期からそんな格好するからクラスから浮くのでは・・・と思ったが、口には出さなかった。

「新学期ですねー」
「そうだな」
「どのクラス受け持つのか、決まりましたの？」
「え？ああ、うん」
「教えてください！せ、先生はどのクラスを受け持つのか！」

アスカは突如普段の行動からは想像もつかない大声を出した。

「い、いやでもさ、お前にだけ教えたらそいつぁ不公平って言うか・・・」
「お願いします！」

アスカの目はやけに真剣だった。

「頼みます先生！あたし、先生が・・・」
「せんせーーーーーい！！！！！！」

突然結華に何かがつっこんできた。

「ふぬぉう！・・・この私にタックル食らわそうってったって、百年早い！！」

「ぐがっ・・・。ち、ちが・・・」

タックル（？）してきたモノは撃沈。

「あ、あの、この方は・・・」

「ん？ああコイツ。コイツは東田蓮だよ」

といいつつ、横たわっている東田蓮を靴の先で軽く蹴る結華。

こんな人が教師でいいのか。

「ひがし・・・だ・・・れん？」

そしてアスカは蓮を知らなかったらしい。

「元1年3組のガキんちょだよ」

「1年3組って事は・・・先生が受け持ってた・・・」

「そうだよ？」

結華は軽く言った。

「先生ぇ・・・。何で抱きつこうとしたのにいやがるんだよ。そんなに俺の事キライ？」

復活した蓮は泣きそうな声でいう。

「ふふふ不潔です！あ、朝から先生にだだだ抱きつこうなんて・・・！あ、あたしだってしたことないのに・・・」
「んぁ？誰アンタ」
「お前ら人の事知らなさすぎだろ・・・。チャイムなるからとっとと教室イケ」
「「あ、先生・・・」」

こんな二人を受け持つなんて、大変だな、と結華は苦笑した。

第三話　新学期～クラス～

「つー事で今日からこのクラスの担任になる、霧島結華だ。年齢も近いと思うんで、敬語なしで話しかけてもらっても結構だからな！」

始業式も終わり、結華はかんたんな自己紹介を終えた。
結華が担任とわかった途端クラスのほとんどが盛り上がったのは言うまでもない。

「先生ーー！これから一年宜しくねー」
「んーー」
「先生ーー！ピーマン食べれないって本当？」
「んーー・・・って誰から聞いた！！」
「赤羽彰から聞いた」
「ピーマン！ピーマン！」
「うるせぇ！（ちょっとだけなら）食べれる！」

そんな中、一際強い目線を感じた。
そこには、嬉しそうな顔をしたアスカと、これまた嬉しそうな顔をした蓮がいた。
正直リアクションに困る。

「先生～。テスト問題かんたんにしてね～」
「先生～。彼氏いるの？」
「あーあーうるさい。じゃあ今からプリント配るぞ。ちゃんとお家の方に見せるように」

はーいと小学生のような返事をする教え子達に苦笑しながら、プリントを配りはじめる。

しかしまぁ、こんな退屈な文章を並べただけの紙切れをよく毎月欠かさず作る事ができるなぁ、と結華は関心する。

「じゃあ私は職員室に戻るから。何かあったらこいよ」

ガララと威勢良くトビラを開ける。

「・・・はぁ～」

「何かお困りですか？霧島先生」

「あ・・・安藤先生」

安藤保孝。たしか２８歳。眼鏡をかけ、理科の教師と思える格好をしているが、これで国語教師というのが不思議だ。

「い～や・・・。別に何でも・・・」

「何でもじゃないでしょう？何かあったんですか？もし僕でよければ力になりますよ。これ、メールアドレスです」

「へ？あ、ああ・・・」

何でわざわざ手書き？

「僕いっつも先生の靴箱の中にメアド書いた手紙を入れてるんですよ～。でも全然返信してくれないでしょう？」

「は？いつも置いてるんですか？」

「ええ。いっつも」

安藤は何故かいっつもの所を強調していた。

だが結華の靴箱の中には何にも入ってはいない。安藤の話が本当なら迷惑なだけだが。

「あ、あと、教師が生徒に強姦された事件知ってますか？」
「は？何でしたっけ」
「結華先生は情報に疎いなぁ」

結華が安藤に殺意を持ったのは言うまでもない。

「ある学校の女教師が、男子生徒に強姦されたんですよ。結華先生もスタイルいいんだし、木をつけてくださいよ。モチロン僕は強姦なんて非情なまねはしません。やるなら初めは優しく・・・」
「そうですか。では」

安藤の方がヤバイだろうに。
結華は何度も後ろをチェックしながら階段を下りる。
そこでふと思う。
もし安藤がいつも結華の靴箱の中に手紙をいれてるのだとしたら、
その手紙はどこに・・・？

第三話　新学期～クラス～（後書き）

はやくヤンデレ部分を書きたいですたい

第４話　同性愛

うるさい目覚ましの音で、結華は目が覚めた。

「・・・何時だ？」

時計は１０時を指していた。
ヤバイ。寝過ぎた。
そんな時、チャイムが鳴り響いた。

『結華先生？』

よく知っている声だった。

「あ、アスカか？待って。今着替えてるから」

いそいそと着替える結華。

「お待たせ。入っていいよ」
「はい」

満面の笑みで答えるアスカ。
結華の家は学校とさほど離れていないため、親しい生徒がよく遊び（？）にきたりする。

「また何のようだ？」
「いえ。たいしたようはないんですけど・・・その・・・これ・・・」

アスカは紙袋から箱を取り出した。

「あの、よかったら・・・」

「何だ？・・・ああ、これ、結構好きなんだよな。ありがとう」

「あ、あ、はい！よかったです」

アスカもこんな自分に媚びてきて・・・物好きだなぁ、と結華は苦笑する。

何だろう。こっちに来てから苦笑する事が多くなったような。

ポーン

チャイムの音が響いた。

「誰だろう・・・。あ、彰・・・」

「あきら？」

「同じクラスにいただろ。赤羽彰って」

「あ、ああ。・・・でも何で？」

「話したい事があるってさ。・・・アスカ悪いけどそこの部屋に隠れててくれないか？」

「・・・何故ですか？」

「いいから！」

結華はアスカを寝室に押しやり、玄関のトビラを開けた。

「いらっしゃい。彰」

「・・・・・・・・」

「・・・相変わらず無口だな」

彰はペコリと頭をさげて部屋に入る。

「何のよう？」
「・・・相談したい事が」
彰はやけに真剣な顔をしていた。
「・・・何かあったのか？」
彰がこういう顔をするのは。よほど追いつめられた時でしかった。
そのため結華にも真剣さが出てくる。
「・・・実は、さ」
「・・・・・・・・・・」
「・・・俺、クラスの・・・・」
「・・・クラスの？」
「鈴宮が・・・好きなんだよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
結華は素っ頓狂な声をあげた。
別に彰が恋をしているからというわけではない。
鈴宮一。完全な男子である。
「何でまた」
「い、いや、その・・・アイツ・・・色んな所が可愛くて・・・」
確かに鈴宮は男子にしては背も小さく、顔つきも女の子っぽくある。
だが勘違いしてはいけない。中身は男子だ。
「・・・仲はいいのか？」

彰はこくりと頷く。

「だからさー・・・どうしようって・・・思ってさー・・・・。・・・・やっぱ男が男に恋するっていけないのかな・・・」

「ま、まぁ一般的じゃないかもしれないけど・・・。ま、恋するくらいならいいんじゃないの？恋愛って誰にでもしていいわけだし。無論同性でも」

「そ、そんなもんか・・・。でも、もし俺がアイツに告白なんかしちまったら・・・」

「そ、その時はその時だろ」

二人が恋仲になったら一部の女性が喜ぶだろうが。

「・・・なんかスッキリしたよ。ありがとう結華さん」

「んー。姉ちゃんに宜しくなー」

彰はスッとしたらしく、妖しい笑みを浮かべながら帰っていった。

「アイツも同性に恋しちゃったのかー」

「先生」

「おわっ」

アスカがゆらっと出てきた。

「あの・・・赤羽君と随分親しかったですね・・・」

「あ、ああ。アイツの姉ちゃんとは小さい頃からの悪友だしな」

友人ではないのか。

「だからよく彰とは顔合わせてたよ」

「・・・へぇ」
「ってちょっと待て。お前話聞いてたのか？」
だとしたらかなりヤバイ。アスカは噂を流すタイプではないが、一応釘を刺そうか。
「・・・内緒にしていてくれないか？」
「はい。ところで先生・・・」
「ん？」
「彰もってどういう意味」
「あああああああああ、わわわわわ忘れろ」
「せ、先生・・・」
動揺しまくりだろう。
「でも、先生は同性愛肯定するんですね。よかった！」
「へ？どういう意味・・・」
結華の疑問は、アスカの「勉強しましょう」の一言で遮られてしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3608h/

先生、大好きです

2010年10月12日06時47分発行